

道具屋冒険紀行

“頭”よりも“道具”を使え

道具屋冒険紀行

ブイヨン✕

一

たまにあるのが、転生した時の役職とレヴェルがランダムに振分けられること。一番イイのは勇者や剣士、しかし、俺の場合は…

「道具屋 Lv999」

なんだこれは。レヴェルがカンストしているではないか…

そう、これは転生したらこんな事になってしまった俺の物語。

○

転生直後は初期装備しかないから、何か収入源を当たらねばならない。

「えっと、今の持ち物は…」

一〇〇〇ゴールド、手持ちナイフ、証明書、火薬袋、空玉。これで何が出来ると言うのだ。

「そ、そうだ。こういう時は役場で情報収集を」

役場はどこだ、と言うまでもなく役場の看板を見つけた。

戸を破ると、珍しいものでも見るような視線に苛まれた。

(な、なんだコイツら)

「あらかサイミツヒト(葛西満仁)様ですね？お待ちしておりましたわ。給品を預かっておりますので隣のカウンターでお受け取りくださいませ」

受付嬢に促されるまま、カウンターから受け取る。

『商業許可証、アイテムポーチ用品一式、折りたたみ商店、一〇〇万ゴールド、聖剣生成術、魔剣生成術、武器加工術、調合術、家、家財道具一式、王族認可証』を受け取った。先ほどの周囲の視線は一気に羨望の視線へと変わった。

「兄ちゃん何者だ！」

「スゲエ、ぜひ俺の剣を打ってくれ」

「俺も頼む！」

皆がせがむ中、一人だけ一線を画する男がいた。

「私の剣も頼めるか？素材は揃っているのだが打ってくれる者がなかなかいなくてな」

そうして差し出されたのは一等品の聖剣だった。

「俺に出来ることなら何でもしよう」

受け取った物から商店を建て、聖剣を構える。

「私の愛剣『斬悪剣―クーネリウス』だ。この強化が最終になる、それを願いたい」

「この剣は長く使っているのか？」

「ああ、私がこの世界に来た時からな」

「聖剣には感情が宿ることが希にある。この剣には『主を守りたい』と言う強い意志を感じる。きつと上手いくさ」

剣を火にかけ素材を溶解し、それをさらに高温で剣に打ち込むことでその効能を得る。

形状がより洗練され、刃が強固且つさらに強い霊力を持った。

「えくと『斬悪の霸王剣―クーネリウス』になって、聖剣スキルとしては『裂空斬』が発現してるな」

「これもミツヒトが？」

「いや、俺じゃない。この剣自身が自らを強くした。さらにあと一回の改修が可能だ」

「そうか、ありがとう。代を払わねば」

「今回はいいさ、その剣の心意気に負けたよ」

鍛冶屋としての最初の仕事は最良の形で終えられた。

一一

次の日は普通に道具屋として店を開いた。

「おい、どおぐやあー！」

ええ……とうとうガキにまで絡まれるようになったのか、俺……

「私に武器をくれ、出来れば飛び道具がいい」

「ボウガン、弓、銃のどれがいい？」

「この素材が使えるのなら何でもいいわ」

そう言って渡されたのは粉塵や火薬袋、幾つかの爪や甲殻、天殻でこれらを使用出来るのは弓くらいしかない。

「じゃあ弓だな、しばらく待っていてくれ」

――加工中――

――完成――

「ほらよ『爆裂弓―スタンマギア』だ、属性付与も可能な万能弓になる」

「ありがと、いくら？」

「金はいい。ただ、その弓はまだ完成していない。誰かに手伝って貰って素材を集めて来な。その後で強化の代金だけを頂こう」

その少女は「あらそう」と言って駆けて行った。そして走って帰ってきた。

「矢が無いじゃない！」

「言ってなかったな、それは弦を引けば矢がつかえられる。引いてる時間によって放

たれる矢の種類が替わる仕様で一律爆破属性が付与されている」
説明を一通りした所で

「ほう。爆破弓か、パーティとしてはなかなかのサポーターだな」
昨日の聖剣使いがやって来た。

「立て続けて悪いが、また頼めるか？」

「強化か？」

「いや、今度はアイテムが欲しい。久々に狩りに行きたくてね」

砥石、回復薬、スタミナドリンクなど、狩りに必要なものを渡した。道具を売るのが
本職の為、今回は代金を頂く。

「この冷え冷えドリンクを持っていくといい、アル・マギナスを倒しに行くんだろ？」
凶星を指されたような表情を浮かべる。

「よく分かったね」

「まあ勘だ。コイツを連れてってやってくれ、マギナスの素材があれば最終強化まで
一気に持ち込める」

その聖剣使いは「行ってくる」と街を出ようとした

「待ちな嬢ちゃん、こいつを持っていくといい、この先楽だろうよ」

エレキパッチ、タイプエクシード、ベノムパッチ。矢に属性付与することが出来る不
思議なパッチで効能はいろいろ。タイプエクシードはその武器の持つ属性を強める効
果がある為全武器種に対応している。

「死なねえようにな」

彼らはヒラヒラと手を振って出ていった。

ーハンティング中ー

半ばボロボロになった二人が帰ってきた。

「随分なやられようだな」

「少々手こずってね、でも彼女が決めてくれたよ。ほんとにいい武器を手にしたね」

「このパッチ、使い易かったわ」

俺の作った物で喜んでもらえた。それだけで俺は嬉しかった。その時魔導帽を被った
女性がこちらに歩いてきた。

「あ、あの・・・お怪我ならお治し致しましょうか・・・？」

その女性は『アークプリースト』のヒューネと名乗った。

「そう言えば、私も名乗っていなかったな。私の名はライアン・ウイスコンシンド。
今後ともよろしく頼むよ」

「あ、私はエリカ・クリシフォン、よろしくね」

その場の3人がキレイに凍りついた。そして、彼女の言葉の意味を静かに理解する。

『ええええ！』

クリシフォンと言えばこの世界の現国王の名と同じ、つまり彼女はその令嬢。

(お…俺は、この娘を戦地に赴かせた…って事か…)

「パパがおうちから出してくれないから逃げ出してきちゃった」

「いやいや逃げ出してきたじゃねえよ、冒険は遊びじゃないんだぞ？」

「暇なんだもん、仕方ないじゃない」

「こりやもう何言っても聞かねえな…」

「なあ、ギルドカードの確認しておこうや…」

『道具屋 Lv999』

『アークプリースト Lv103』

『聖剣使い Lv87』

『王族 Lv1』

「え、Lv1?」

「うん、」

王族がレヴェルってなんだよ、この世界はデタラメか？

「それを言うならミツヒト、君はカンストしているじゃないか」

「ああ、うん。何があったんだろう」

「と、取り敢えず回復しますね…」

呪文を唱え、回復する。かなりの魔力によって完璧に回復した。

「んじゃあ、こつちもよろしくね」

武器、素材を受け取り火にかける。

――加工中――

――完成――

ついででは無かったが、ヒューネの杖の魔力を高める改修も施した。

二二

街は荒れていた。

「大変だア！魔王軍が攻めてきたぞお！」「みんな逃げろお！」などと騒ぎ立てている。

この世界での『魔王軍』はモンスターや魔物を世に放つ劣悪な連中を言うを例えば、あそこにいる悪魔の娘みたいなの…んんwwww

うわ、悪魔の娘が町まで来てる

…捕まえよ

――ミツヒトは悪魔を捕まえた――

「はーなーせー！」

「こんな駆け出しの街に何の用だ、ああ？」

「あたいは魔王軍じゃないっっちゃ！」

「じゃアここで何してやる」

「ここに凄腕の鍛冶屋がいるって聞いたっっちゃ、だからあたいの魔剣を強くしてもらいに来たんだっっちゃ！」

訳が分からないが、俺を目当てに来たらしい。「見せてみな」と言おうとしたが、多数の火炎弾が街中に降り注ぎ、次々と破壊していく。

「先に逃げようか、続きはその後だ」

「ミツヒト、早く、こっちへ！」

ライアンに呼ばれ、店を収納しつつ地下都市へと逃げ込む。何とか助かったが、この街は…

「その娘はなんだ？」

「上で拾った、観たところ皇魔族かな。悪い娘じゃ無さそうだし、俺を当たって来てるみたいだ」

皇魔の少女の元へ戻る。

「さ、見せてみな」

見事な打ち味の双剣、それも魔毒と魔撃の双属性。恐らく俺なんかよりも余程腕の立つ職人の業だろう。

「悪魔の体液が一枠足りてないぞ？」

もちろんのことだが、素材が足りてないと十分な強化が出来ない。

「あたいの血なら、そんじょそこの悪魔の体液よりも強力っっちゃ！」

と、掌を斬り、双剣が血を浴びる。紫の刃部が青く輝き、火にかけると刃がより凶悪な形状を持ち、凄まじい魔力が溢れ出している。熱いうちに甲殻や尖角を組み込む。

――加工中――

――完成――

「ふう、冷つとしたが『皇魔双刃ーツインスラスト』だ。一斬毎に魔力が高まってくる、毒撃を与えれば与えるほど毒が強くなる逸品だ」

「ありがとうだっっちゃ、これで戦えるっっちゃ！」

「戦うって、誰とだ？」

「決まってるっっちゃ、魔王軍だっっちゃ！」

何を言い出すかと思えば、この娘はたった一人であの戦力に立ち向かおうとしていた。いくら双剣が強くても多勢に無勢、殺られる。

「はっ、行かせられる訳無いだろ！」

「それでも、あたいは行く」

「行かせるわけないだろ？一人でなんて」

「相手は大戦力だ、私たちが手を貸そう」

「王族としては、アイツら見過ごせないわね！」

「バックアップは任せてください！」

そして、はにかみながらもハッキリとした声を張った。

「それに、相手が悪魔なら聖魔導の私が有利です！」

「決まりだな」

立ち上がり、決意を秘めた表情を浮かべる。

「助けてやれるのは道具屋としてだけだが、やれることは全部やろう。俺もこの世界の住人だ、卑劣な奴らは排除してやるっ！」

この五人の意思は固く、寸分変わらず同じだった。

たかが魔王軍の、たかが撃退。倒さなくてもいい、退けられれば大金星だ。

（ああは言ったが、道具屋の本懐は戦闘にある。俺の立ち回りが上手く行けば戦況を大きく変えられる！）

キュツ、と唇を噛み締め、通路を駆けた。

四

街は閑散としていた。建物という建物はすべて破壊され、逃げ惑う人々は殺められ、もはや人一人残ってはいなかった。

「結構派手にやってくれたわね、また始末書が増えるわ……」

「いやそこじゃねえだろ」

「あやつら、一街ずつ壊して回っているみたいだな。もう引き上げている様だが……」

「どの道悪趣味だっちゃ」

その刹那。多数の飛来音が多方から一気に鳴り、火炎弾が飛んできた。静かに舌を打つ。状況を理解出来たからだ。

「ちっ、嵌められたか……！」

「だが、私たちしか戦える者は……」

「イイ男二人が情けない！腹括りなさいよ！冒険者でしょう！」

こちらは装備品と多少のアイテムと溢れんばかりの心意気だけは一級品の五人。対して魔王軍は数多の魔獣と子分と、大型モンスターを数匹携えた幹部に……魔王がバカみたいに君臨している。

（え、魔王いんだけど、草）

（魔王は控えてるモノじゃないのか……（困惑）

（魔王……あっ（察し）

(魔王はバクケツクンクニークだっちゃ(汗))

(今すぐに浄化したい……)

何故か五人の矛先が魔王軍の悪事ではなく、魔王自身がここにいる事に向けられた。設定上(言っちゃダメだが)魔王は戦地に赴かない。はずなのになあ……

一斉にため息を零した。

『ぶち殺せええええ！』

怒号と共に駆け出す。ある者は剣を構え、ある者は矢を番え、ある者は高く跳び、ある者は呪文を唱え、ある者はものを生み出す。

多勢に無勢だと思われたこの戦は、開幕戦からワイバーンを墮とされ、魔獣は地を舐め、大型モンスターは真っ先に死の底へと追いやられ、盾となるものが何一つない状況へと変化した。

ライアンは魔王軍幹部、デュラハンを剣を交えていた。

「フハハハハ、小僧やりおるな。だが！我がデュラハンの前では無力！」

首を高らかに投げあげ、魔法を放つをあらゆる太刀筋を読み切り弾く。そして、魔力を込めた一撃を与える。

「っー」

声にならない叫びを上げる。

「ハッハッハ！またあの世で手合わせしてやるぜ」

その時、打ち倒したはずの男の声が響き渡った。

「貴様の魔力もまた、私のクーネリウスの前では無力という事だ！このライアン・ウィスコンシン、尋常の勝負で地に還してやろう！」

クーネリウスが霊力を発現、凄まじい速さで力を高めていく。

「真・聖剣技！裂空衝波斬！」

その一太刀一太刀から繰り出されるエネルギー波はデュラハンの魔力をも超え、その身をズタズタに切り裂き続け、遂に最後の一撃で討ち取ることが出来た。

魔王軍の手下を率いるデュラハンの敗北により、幹部軍は急激に魔力を失っていった。

そしてその時、その男はとある大剣を打ち込んでおり、ライアンがデュラハンを討ち取ったタイミングで完成させた。

鉄を裂き、神魔を超越する大剣『竜王剣ーイクストラパルト』

この大剣にはより強大な魔力が必要になる為、デュラハンの魔力を組み込むことで実現した。

大型モンスター全般を相手取っていた皇魔のフレデリカとヒューネ。フレデリカの

双剣は手数が多い反面切れ味を損ないやすい。それをヒューネの魔導により保たせることで、常に最大限以上の火力を叩き出し続けた。

「随ちろおとおお！」

フレデリカの剣捌きは回転や切り返し、連撃といった太刀筋を幾通りにも組み合わせ、多彩な攻撃パターンを魅せていた。普通飛んでいる間の自由な動きは難しいが、彼女は皇魔の娘。空こそが戦場。利を盗られたモンスターは次々に斬り刻まれていく。

「ヒューネ、後ろの三体よろしく、雷、火が有効！」

「分かりました、アルドヴォレット！」

火炎放射のような炎の渦が吹き出し、巻き込まれたモンスターを焦げた肉の塊へと変えていく。

未だにグリフォンやゴブリンが残っているが、魔王軍の戦力は確実に削がれている。

そして、魔力でも霊力でもない爆発が発生し、下っ端が根こそぎ巻き添えをくらう。

「拡散型って、案外使えんのねでもやっぱり……」

引き絞られる弓が高らかに軋みをあげる。

「こつちでしょう、がっ！」

翼をもがれた翼竜がこちらを向く。頭から弓の直撃を受けるが、その弓の矢は凄まじい爆発を巻き起こし、翼竜の顔を文字通り吹き飛ばす。

「そうそう、この感触、病みつきだわあ」

葬られた翼竜、その先にいた翼膜を裂かれ、飛び立つこともままならない飛竜種が咆哮した。

しかし、誰も耳を塞ぐことなく己の使命を全うする。

「俺の耳栓は、一味も二味も違うんだぜ？」

ポーチからある一つのものを取り出す。

「お前らア！耳と目、めいっばい塞げェ！」

その球体のモノを蒼空目掛けて投げる。

「フツ、使うの頭じゃない、アイテムだ！」

鮮烈な閃光と凄まじい爆音が辺りを包み込み、あらゆる感覚器官を麻痺させる。この五人以外の。

その隙を見逃さず、トドメを指す。一通りの周辺掃討を終えた後、魔王が動き始めた。

五

「貴様らはよくやった。が、それもここまでよ。」

ノコノコ戦場に顔出しやがった魔王が何を言ってるんだか。

その反面、このバカさえ倒してしまえばそれで終わる。

「さて、最終局面だ、やるぞ」

調整を終えたばかりの大剣を担いで、すたすたと歩いていく。

「貴様から死にに來たか、望み通りにしてやろう」

魔王が手をかざすと魔力の結晶『アルヒューマ』が現れ、超音速でミツヒト目掛けて突っ込んでくる。破片と砂塵でミツヒトの姿が見えなくなる程に激しく強い一撃だった。

生存は絶望的と思われた矢先――

「この程度の攻撃なのか、アルヒューマってのは」

無傷のミツヒトがため息を付きながら煙から姿を現す。

「わざわざスキルインターセプトする必要もなかったかなあ……」

『スキルインターセプト』とは、受けた攻撃スキルを自らの物にし、自在に放つことの出来るコピー式の能力で、ミツヒトにしか組み込めない高度な技術だ。

ミツヒトが手をかざすと、靈力の結晶が現れる。

「アルヒューマー！」

魔王のそれとは比べ物にならない速さと威力の結晶が弾け飛び、通過しただけでも巨木を断ち切った。

そして、魔王はなす術なく直撃を受け、大打撃を受けた。

「なん……だと……?」

この魔王、ホントはスゲエ雑魚なんじゃないか?という仮説が頭をよぎったミツヒトは相手のステータスを読む魔法『スパルタクストレーサー』を使った。

『魔王 Lv50』

え、何このクソステータス。魔王で普通レヴェルカンストした上で、攻撃無効とかのチートスキル持つてるもんだろ?

アルヒューマの特性上、自分よりもレヴェルの高い相手には効力を成さない。

本来のシナリオなら俺が瀕死の状態から神的な復活を……(長たらしいので省略

「き、貴様、何者だあ?」

「さあな、どっかその辺のお……」

イクストラパルトを振りかぶる。

「ただの道具屋だア！」

その一太刀は今までの何者にも出せない火力を叩き出し、魔王を真つ二つに切り裂いた。

こうして、この世界にまた平和(笑)が訪れた。

この後、ミツヒト達は報奨金を受け取って、正式なパーティとして受理された。

――報奨金一〇〇〇万ゴールド

――被害総額二一四〇万ゴールド

――負債 一一四〇万ゴールド

賞金は、被害総額に全額当ててもなお、マイナス値を示してしまった。

「あたいら借金持ちだっちゃ……」

「私、お金はあんまり持ってないです……」

「パッケチだからお金くれないわよ？」

「ほぼ私の責任だ、すまない……」

「割に合わねえなあ、俺達の頑張り……」

一斉にため息を着いた

『クソ虫がアアアアアアアア!!』

借金を抱えたミツヒト達の冒険紀行はまだまだ続く。

――完――

原作：「デス・パラダイス」

著：ブイヨンX

企画：Johnny

落丁あればお気軽にお申し付けください

お問い合わせ(ぶいよん)

http://line.me/ti/p/2mV_PA9Kqj